

「響きあう心と音楽」 第14回ふれあいコンサートを終えて

第十四回ふれあいコンサートも無事に終えることができました。小ホールとはいえ、お客様も満杯状態でした。アンケートも、(5段階で)5、4という評価がほとんどで、第一回目の演奏会では、「多くのアマチュアオーケストラを聴いたがワースト5に入る」という酷評があったことを知る身としては嬉しいかぎりでした。そして何よりも、感想として「生き生きしている」「音楽を楽しんでいる」というものが多く、「みんなで音楽を楽しみたいという喜び」を、我々と同輩の方たちが多かったお客様たちにも共に持っていたら良かったということが感じられ、本当に嬉しく思いました。まさしく「ふれあいコンサート」となったのではないのでしょうか。

今回はブラームス二番、難曲ということで、これまで月二回だった練習も毎週に増えました。以前トラに来たことのある人から「CMOでブラームスできるの？大丈夫？」と言われた時、「大丈夫できる」と言えない状態ではありましたが、毎回練習を休む人も少なく、初めて弦・管のトレーナーにも来ていただいた有意義な分奏の練習もできました。そして齋藤先生の熱心で辛抱強い御指導のもとみんなが気持ち一つにして励んできた半年間であったと思えます。「時々いい時があるよ。それを増やしていこう」という先生の力のおもったことば、「よくなりましたねえ！」とおっしゃるとびぎりの笑顔——心に残っています。

そして、とにかく「ブラームス」をやっておせました。それぞれがなんらかの達成感をもって演奏会を終ることができたのではないのでしょうか。打ち上げに三十人もの参加があり楽しい時を過ごしたことに、みなさんの気持ちがいま、CMOは前進していると思います。来年は創立十周年。更なる前進に向かいます。

CMO副団長・第2ヴァイオリン 村上 葉子

第14回ふれあいコンサート アンケート集計結果

- 回収人数 90人
- 全体的評価 (5段階評価で)
 - ⑤ 41人、④ 34人、③ 8人
- コンサートを何で知りましたか
 - ・団員から 43人
 - ・ポスターやチラシ 18人
 - ・CMOのホームページ 3人
 - ・案内はがきで 9人
 - ・友人・知人から 4人
- これまでCMOのコンサートに来たことがありますか
 - ・初めて来た 38人
 - ・来たことがある 48人
- 次回演奏会に来たいと思いますか
 - ・できれば来たい 79人
 - ・分らない 5人
- 自由感想
 - 「一生懸命演奏している」「迫力がある」「年を取られた方がハツラツとしていて」「生き生きしている」(同様の感想が多数ありました)
 - そのほかには、「なんといいってもみんなが楽しく酔っている」「一人一人がよく練習したことが分かる」「指揮者と演奏者の気持ち一つになつていた」「生涯を通じて共に音楽を楽しみ姿勢がとても素敵」「弦楽器の音がきれいで」「ブラームス二番、演奏者の感動が伝わってきた」「音の羅列にならず常に音楽的に演奏しようという心がけていた」「素晴らしい演奏しやうと心がありました。感謝です」などの評価のほか、アンサンブルについての辛口の感想もいただきました。また、「『ふれあい』とあるので、曲ごとに1分間ほどの解説があってもよいのではないかとのご意見もありました。



チェリビダッケと筆者

CMO 常任指揮者 齋藤純一郎

「心の羽飾り」となった一言

23年にわたる彼との長いお付き合いの中で、記憶に留めておきたいエピソードは、まだまだたくさんある。34年ぶりにベルリン・フィルを指揮した時のこと。日本公演でのミュンヘン・フィルとの奇跡的な名演、芸大で教えた時のエピソード、一緒に寿司を食う機会があったこと、彼が妙に指揮しながらない曲、ベートーヴェンの《第9》を聴きにミュンヘンに行ったこと、これがお別れだと覚悟してミュンヘンに出かけたブルックナーの《第9番》のりハーサルと本番などなど。

チェリビダッケの日本公演では、すべてのりハーサル、演奏会に同行した。ある日、ドイツ大使館のパーティがあった。そこで、大使館の文化担当者に私をこう紹介した。「Jun ist mein Schüler (ジュンは、私の弟子だよ)」。

私の「心の羽飾り」となったこの一言で、人生を棒に振ったことを、後悔することはもうない。

ついに! 最終回

我が棒振り修業時代! 指揮者 齋藤純一郎

Jun ist mein Schüler
「ジュンは、私の弟子だよ」!

チェリの音は一つも聞きもらすまいとポーニーヤの講習会を終えて、満ち足りた気持ちでウィーンに戻った私が真っ先に考えたことは、「絶対にチェリさん詣でしよう!」。それは彼の指揮する演奏会とリハーサルをできるだけ見学させてもらおう、ということだった。当時チェリビダッケは、シュトゥットガルト放送管弦楽団と信頼関係をもとに契約書のない常任指揮者、そしてパリのフランス国立放送管弦楽団(ORTF)の二つを主に指揮していた。

そこで私は、何をさておいてもチェリビダッケの演奏会の予定に合わせてシュトゥットガルト、パリに出かけ、リハーサルから演奏会まで彼が音を出す瞬間に立ち会おうと決めた。

リハーサルの思いでは尽きない。まずシュトゥットガルト放送交響楽団。《トリストアンとイゾルデ》の前奏曲の冒頭のチェロの音とテールの絶妙さ、「愛の死」の終わりでは満天に星が瞬いているような宇宙的広がり空間を響きで創造してしまふ。シュトゥットガルト放送交響とORTFでの《ダフニスとクロエ》。

第2組曲の冒頭で、始めの2小節のフルートとクラリネットの二声部が調和しながら粒立ち良く全部明瞭に聴こえてきたバランスには、度肝を抜かれた。また、ORTFでのラヴェルの《ラ・ヴァ

ルース》が、このように精密かつ生き生きと演奏されるのを聴いたことがない、この曲の真髄を教えてもらった。

エーソン村の山荘の想い出

そんなある日、「ORTFのコンサートは、全部キャンセルした。時間ができたので、君たち二人(アメリカ人の友人と私)、レッスンをあげるから別荘にいらっしやい。一晩泊まって行くよ」。

では、14時に待っているよ。とチェリが言ったのだ。「うそ、あり得ない!」と思いつつ、翌日、シビックのような小型のルノー5をレンタルして、エーソン村に出かけた。「村に着いたら、チェリビダッケといえば知らない人はいないから聞けばすぐわかる」。

聞かなくてもすぐわかった。煙突に「S」(セルジュ)のイニシャルが入った水車小屋もある大邸宅が、それだった。茅葺の瀟洒な門構え、前を流れる小川のほとりに立つしだれ柳が風情を添えている。門番が呼び出してくれた。「お、来たか」という顔で迎えてくれた。早速2階の部屋へ。30畳はありそうな床も木造のレッスン室。ヤマハの中型のグラインドピアノもあり、そこでは若い学生たちが集まって、アンサンブルのレッスンもできる広さがあった。

レッスンの思い出は、人生最高の思い出であると同時に悲惨でもあった。ちょうど花粉症の一番ひどい春先のこと、ティッシュを離せずグスグスしていたら「お前は、花粉症か? それならこれが



チェリビダッケと寿司屋にて

効く! 飲み。ちゃんと飲み! もつと飲み! アルコール濃度がかかなりある薬草酒だった。それでも私は気丈に振舞ったつもりである。休憩中に庭にでて、案内してくれながら、タンポポの花を刈っていた。広大な庭、何千坪あるのだろうか? 夕食に振舞ってくれた野菜は全部自家栽培だそう。レモンの香りがする葉っぱだろ。翌日も、午前中のレッスンで、「これ、私が作曲した曲だよ、連弾してみないか?」。狼狽して、遠慮してしまった。痛恨の極みだ。一音でも一緒に連弾していたら……、今頃は大威張りだったろうに。その曲は今思うにレコードにされた彼の唯一の作品《秘密の小箱》のフレーズだったと思う。

夢のような時を過ごし、ルノー5を私が運転してチェリをパリの自宅まで送っていった。せつかなチェリは、「シユネル・シユネル!」(早く・早く、もつと早く!) 運転せよ、というのである。事故を起こさないでよかった。